

## 3-6. 妙高市（新潟県妙高市）

### (1) アドバイザー派遣申請の背景

#### ●地域の概要

妙高市は、新潟県の南西部に位置し、上越市、糸魚川市、長野県の飯山市、長野市、北安曇郡小谷村、上水内郡信濃町に接している。面積は、445.52km<sup>2</sup>で、新潟県総面積の 3.5%を占めており、妙高連峰に源を発し日本海に流下する 1 級河川の関川、矢代川が南から北に向かって市域を貫流している。日本百名山の秀峰妙高山をはじめ、火打山、斑尾山などの裾野は広大な妙高山麓の高原丘陵地帯を形成し、北東部には高田平野が広がり海へと続いている。

妙高山麓一帯は上信越高原国立公園に属し、雄大な自然の景観と四季折々の変化に富み、湧出量豊富な温泉やたくさんスキージ場など観光地を抱えている。

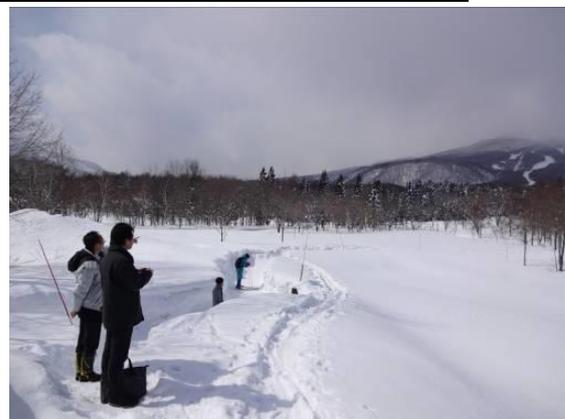
交通基盤については、JR 信越本線が中央部を走り市内には北新井駅、新井駅、関山駅、妙高高原駅がある。また、上信越自動車道、国道 18 号をはじめとする幹線道路が整備されている。

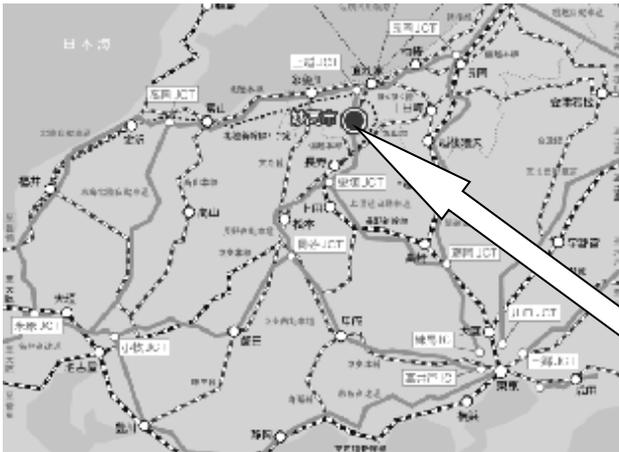
妙高市の基本理念は「生命地域の創造」である。かけがえのない自然や生活文化、歴史、産業など、全国に誇れる地域資源が数多くある。自然と調和した、地域の魅力を活かしたまちづくり、そして人と自然のつながりを大切にする躍動と夢の郷を目指し「スロートーリズム」、「グリーンツーリズム」、「ヘルスツーリズム」、「アート&カルチャーツーリズム」という 4 つのツーリズムを進めている。

気候の特徴は冬の多雪である。これは、日本海側気候の影響によるもので、西高東低の典型的な冬型の気圧配置が天気図に現れる 12 月～2 月、シベリアからやってきた冷たく乾燥した北西の季節風が、日本海上で湿気を吸い、帯状の雪雲に発達して日本列島を通過する。その時最初にぶつかるのが妙高市内の「妙高山」や「火打山」などの頸城連峰で“日本で一番季節の変化を実感できるまち”と言える。

市内における旬の嬉しい話題として、先日開催されたソチ五輪のジャンプ団体において、妙高市出身の清水礼留飛選手がメンバーの一番手として日本チームの銅メダル獲得に大いに貢献してくれたことが挙げられる。

位 置	東経 138 度 22 分 57 秒	北緯 37 度 04 分 15 秒
面 積	445.52km <sup>2</sup>	
広 ぼう	東西 33.7km	南北 30.1km
周 囲	186.2km	
海 抜	最高 2,461m	最低 24.7m





【妙高市の位置】

気象

(観測地点：新井消防署)

年次	気温 (°C)			降水量 (mm)		雪 (cm)	
	平均	最高	最低	年間降水量	日最大	年間降雪量	最深積雪
平成 23 年	12.6	37.3	-8.5	1,496.0	70.5	976.0	303
平成 24 年	12.5	37.5	-7.0		88.0	673.5	167

\*平成 24 年は雨量計故障の為、年間降水量は掲載不可 (日最大降水量は 7 月 13 日～11 月 30 日の間の値)

人口及び世帯数

年次	世帯数	人口			備考
		総数	男	女	
平成 22 年	11,801	35,457	17,101	18,356	国勢調査 (10 月 1 日現在)
平成 23 年	12,273	35,664	17,346	18,318	住民登録 (3 月 31 日現在)
平成 24 年	12,300	35,287	17,138	18,149	住民登録 (3 月 31 日現在)

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

平成 17 年度に新井市が妙高高原町、妙高村を吸収合併する形で妙高市が誕生したが、合併に際し何よりも大切にしたのは「妙高」という名称であった。以来、人と自然が共生し、すべての生命を安心して育むことができる「生命地域の創造」を基本理念に掲げるとともに、上信越高原国立公園内の「国立公園 妙高」を旗頭に自然環境の保全と観光振興に向け、まちづくりを行っている。その中でも合併を機に開始された、豊かな自然環境を守り継承していくことを目的とし、地域資源を活用した観光地としてのイメージ向上をも合わせて、ゴミ拾いをはじめとする自然保護・保全活動や健康をテーマとした市民参加型イベント「エコ・トレッキング」を開催してきた。ここまで一定の成果が出ていると評価しつつも、本来の概念である「地元主導型」という点ではまだまだ不足する点もあると考えており、またさらなる地域資源の活用や発見を目的として有識者の方からの意見を頂戴したいと考えている。

平成 27 年春には北陸新幹線が金沢まで開業する。新駅の名称も「上越妙高駅」に決定されるなど、妙高の名が掲げられることとなった。国立公園の魅力アップ及びエコツアー活動の充実が図ることができれば、さらなる地域活性化に向けた起爆剤となると考えている。

主な今後の検討課題としては…

- ①妙高地域における資源の洗い出し及び再評価
- ②エコツーリズム (総合健康都市づくり) の推進への可能性と実現
- ③自然歩道・登山道の整備と活用 (山岳リゾート)

- ④自然環境の保全、妙高に相応しい景観の修復・創生
- ⑤インストラクター、ガイドの養成と魅力発信のための拠点整備
- ⑥関係機関、関係団体等による保護・活用に関する横断的な組織の設置 など  
といったものが挙げられる。

## (2) アドバイザー派遣の概要

日 時	平成 26 年 2 月 24 日 (月) ～平成 26 年 2 月 26 日 (水)
場 所	妙高市役所、道の駅あらい、妙高市観光協会、斑尾高原観光協会、妙高高原ビジターセンター、いもり池、妙高高原メッセ、赤倉観光リゾートスキー場、妙高杉ノ原スキー場、妙高高原支所
ア ド バ イ ザ ー	環境カウンセラー (広報戦略)、環境映像ディレクター・プロデューサー 鈴木 順一朗 氏
参 加 者	斑尾高原観光協会、妙高自然ソムリエ、国際自然環境アウトドア専門学校、夢見平遊歩道を守る会、環境省自然環境局国立公園課、妙高市 (環境生活課、観光商工課) 計 15 名
スケジュール・方法	<p><b>【1 日目】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・市職員へのヒアリング 妙高市におけるエコツーリズムに関連する事項の現状説明や課題整理</li> <li>・道の駅あらい視察 道の駅内の情報館や物産館の状況確認</li> </ul> <p><b>【2 日目】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・視察 妙高市観光協会事務所、斑尾高原観光協会事務所、妙高高原、ビジターセンター、いもり池 事業内容や展示物、フィールドなどの確認</li> <li>・関係団体を交えた意見交換会 エコツーリズムの概要説明や関係団体の課題などの整理</li> <li>・宿泊施設での聞き取り調査 宿泊者 (多くが外国人) からの聞き取り調査</li> </ul> <p><b>【3 日目】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・赤倉温泉内での観光客からの聞き取り調査や現地視察 温泉街での観光客から聞き取りや温泉街の様子を確認</li> <li>・市内スキー場の視察 赤倉観光リゾートスキー場、妙高杉ノ原スキー場 入込客数や施設、整備内容の状況確認</li> <li>・3 日間を振り返っての総括及びアドバイス アドバイス内容を確認し、今後の妙高市の方向性を探る</li> </ul>

## (3) アドバイスの内容

### ●妙高市が考える現時点での課題

#### 「自然環境保全に関する課題」

- ・ いもり池の環境保全
- ・ 高山植物の保護・生物多様性の確保
- ・ 希少動植物の保護 (ライチョウの保護)
- ・ 環境教育による国立公園に関する意識の強化
- ・ 景観の保全

#### 「利用に関する課題」

- ・ 新幹線開業に伴う受け入れ態勢の整備と広域連携の強化
- ・ 妙高を楽しむための観光基盤の整備
- ・ 自然・温泉・食材など地域が誇れる観光資源の活用
- ・ 妙高地域の価値の再評価と効果的な情報発信
- ・ スキー観光産業の再生
- ・ 外国人観光客の誘致

#### 「国立公園内等における管理運営に関する課題」

- ・ 環境省や地域関係者による連携の強化

### ●アドバイザーからの意見

- ・ 地域の活性化（主に経済面）にどう結びつけるかが一番重要。
- ・ スキー産業自体は残念ながら成長産業ではない。  
⇒跡地利用ということも今後検討していく必要がある。
- ・ スキーに来る魅力とは？首都圏等からの日帰りツアーバス等も充実していて実際、宿泊には結びついていないのではないか？「来場者数＝収益」ではないはず。
- ・ 観光面では広域連携機能強化は非常に重要なテーマとなる。
- ・ 北陸新幹線の最寄り駅（上越妙高駅）が素通りしないための仕掛けづくりは必須。
- ・ 妙高市の基本理念である「生命地域の創造」についてはネーミングが一般市民からは具体的にどのようなことか？何をするのか？が見えてこない。エコツーリズムを市として取り入れるのであれば「エコ」は物事の根底に出てくる部分なので基本理念の見直し、および、訴求が必要である。
- ・ ターゲットを絞ることで何から始めたら良いかが出てくる。整理した後に欲張らずに1つの柱（妙高の売りや武器）になるものを見つける。多くのメニューを出し過ぎることは中身が薄くなったり、経費がかさむだけである。まずは妙高市にとって一番の売り出すべきものは何なのかを再発見し、集客を成功させてからメニューを増やしていくことが大切。
- ・ 環境教育はとても重要である。元々、我々が使っている全ての物に命があり、それを使っているという「命のつながり」を認識することが大切。そして、そうしたことを観光客に対してだけでなく、市民に対しても、郷土愛や故郷を学べるような視点で行うことが大切である。教えるのではなく、伝えていく姿勢が重要。
- ・ 「食」というテーマも重要である。

### ●関係団体を交えた意見交換会

- ・ エコツーリズムは「お金をもらっての産業」である。観光であるわけだから収益の上がる事業展開をしなければ継続できない。
- ・ かつて世界のエコツアーが日本のメディア（BSでの番組など）で盛んに取り上げられた時期があり、エコツアーが観光のトレンドになりそうな時代があり、その頃にわが国におけるエコツーリズムの考え方が生まれてきた。しかしその後の経済の低迷化や東日本大震災により、状況が変化した。その現状を認識した上で、現在に合ったエコツーリズムを考え展開することが必要になってきている。
- ・ エコツアーのガイドを行う上で「ボランティア」と「ガイド業者（プロ）」をしっかりと棲み分けすること。参加者にはしっかりと明示する必要がある。ボランティアへお願いする側にお願いの仕方の問題などはあると思う。
- ・ エコツーリズムのメリットとして「国立公園」内での規制緩和や、環境保全に必要な新たなルール作りが挙

げられる。そのメリットを上手く利用し合うのがエコツーリズム導入のメリットである。

- ・ エコツーリズムを取り入れるのであれば行政が中心になり、しっかりとした土台をきっちり築くこと。継続可能な組織づくりと予算管理が必要である。
- ・ 今は「映像（動画）」というツールの時代。携帯電話のユーチューブでも見られる時代。パンフレットだけではなく、生きた情報を受け取る側に伝えていくことが大切。
- ・ ビジネスチャンスとしては「外国人」をリピーターにすること。理由はリピート率が高くて滞在期間も長いこと。冬だけでなく、夏もリピートしてもらえるような仕掛けが必要。そういう観点からトレイルは可能性がある。また特に欧米人は「トレイル」の楽しみ方をよく知っており、かなり興味を持っている。この意識にうまく働きかけ夏の集客を考えることは価値がありそうである。外国語でのガイドや案内ができることが肝心であり、これが出来るだけでも大きな目玉になり、話題性も高い。
- ・ 「祭り」には、人と自然のルールというものが存在する。それは継承していかなければならない。
- ・ 子供向けの環境教育を充実させてほしい。「体感（五感をフルに使った体験）」という部分が近年減ってきていると感じている。大人の責任としてそのような場を提供していくことが大切である。
- ・ 震災前の当たり前のように目の前にあった日本の風景が震災後消滅し、改めて偲ばれている。なくなって初めてわかることもある。大事なものは「未来に何を残してそして伝えていくのか」を再確認し、実行することである。
- ・ 自分の住む町の良さ、素晴らしさを子どもに伝えなければならない。もちろん子どもだけではなく市職員を含めた一般住民も同様である。
- ・ 「国立公園」は海外からみると、価値のあるブランドである。
- ・ 妙高を「日本の宝」だけにとどまらず、世界に進出させてほしい。特別な場所であることを十分に PR すること。
- ・ 元々全ての物（者）は生き物であり、「エコ」という言葉の捉え方は難しいなかなか簡単に答えの出ないテーマだと思う。しかし自然とのつながりを再認識することで方向性が見えてくる。

## ●総括

- ・ エコツーリズムの考え方から「観光」は切り離せないもので、それに必要不可欠である広報戦略と宣伝は必須である。
- ・ 妙高市の基本理念である「生命地域の創造」がエコツーリズムの考え方に合致しているので「エコツーリズム」へ取り組んでもらいたい。合わせて、内外に対しての環境教育も盛り込んでもらうようお願いしたい。
- ・ 既に「森林セラピーロード」を活用したエコツアーや百名山である妙高山や火打山の登山コース、貴重な山野草、ライチョウを象徴とする希少生物などを含めた雄大な自然、他含めて「宝」と呼べるような環境が妙高市内にはある。しかし、それらは他の地域より特に突出しているような魅力的な素材ではないため、今存在する「宝」を再確認して、さらに磨きをかけて輝かさなければならない。セラピーロードやいもり池を活用した魅力的な素材作りが急務である。
- ・ 現時点では市全体としてはまとまってはいないが、エコツーリズムの考え方を推進、そしてエコツアーを展開する担い手には恵まれていると思う。ガイド団体や国際自然環境アウトドア専門学校と上手く連携出来、持続可能な経済効果を含めた計画が進展すれば他の地域の追従を許さないくらいの恵まれた可能性を秘めている。



斑尾高原観光協会にて斑尾高原の地形確認



妙高高原ビジターセンターにて館長の説明を受ける



いもり池にて妙高山を望む



関係団体を含めた意見交換会の様子

#### (4) アドバイザー派遣の効果

##### ●参加者や関係者に与えた効果

- ・ エコツーリズムに対する知識、意識の啓発

##### ●今後の期待される効果

- ・ 上信越高原国立公園からの分離独立を視野に、地域資源の保全及び活用方策、管理運営体制等について、関係機関・関係団体による検討委員会を設置し、「妙高ビジョン」として取りまとめ、策定するにあたっての“きっかけ作り”の場となったこと。

##### ●今後の取り組み

###### ・国立公園の協働管理体制の構築

- \* 環境省などからアドバイスをもらいながら、地域資源の保全及び活用方策、管理体制を関係団体と共に検討する

###### ・「総合健康都市」との連動

- \* 「トレッキング」「食」「温泉」をテーマとした健康活動の増進
  - ・ 妙高のソウルフード的目玉商品の発掘や登山中やトレッキング中に食べることのできる妙高オリジナ

ルの食べ物の開発や気軽に温泉入浴が出来るような仕掛けづくりを行う

- \* 市内各地におけるウォーキング運動の充実
  - ・ 平成 26 年度に公表予定のマップを活用する

#### ・環境教育の充実

- \* 既存の「夏休み親子自然教室」の発展や充実
- \* 「(仮)日本の宝・ふるさと妙高を知ろう！」を市内小中学校の授業で展開
  - ・ 市長や教育長といったトップ自らによる出張授業も検討
- \* 知識及び実地経験豊富な国際自然環境アウトドア専門学校とも連携する

#### ・情報発信の強化 (時期を逃さない広報戦略)

- \* 内向け「市民に郷土愛を植え付ける」と外向け「日本(妙高)の自然の素晴らしさを世界に伝える」の情報発信戦略を練る
- \* 海外向けに「国立公園妙高」⇒「ナショナルパーク MYOKO」としての PR
  - ・ 海外での「国立公園」への注目度や認知度に賭けて、既存のウインタースポーツでの既存客はもちろん、グリーンシーズン(トレッキング、登山など)向けの PR 方法の検討
- \* 宿泊施設や観光施設での外国語案内などによる「妙高版“お・も・て・な・し”」の実現

## (5) アドバイザー派遣を実施して(地域からの声)

---

### ●参考となった事項

- ・ エコツーリズムのメリットに対する認識について
- ・ エコツーリズムでの「行政」の在り方について
- ・ 妙高市で掲げている基本理念との整合性について

### ●その他感想

外部に目を向ける以前の問題がまだまだ妙高市には山積みになっていると思った。私自身も含めて、市民の中には「妙高の魅力」を知らない方々が大勢いると思う。知っていたとしても、その全てを知っている者はごくわずかだと思う。今、まずやらなければならないことは、子供はもちろん一般市民に妙高のポテンシャルを理解して、自分達の郷土に対する愛着心を持ってもらうことだと思う。それが魅力的な情報発信にもつながってくるのではないかと思う。

行政人には数年サイクルでの異動というものがあるが、特に環境行政にはスペシャリストの存在や育成が必要ではないかと考えさせられた。

最後になるが、世界的な広い視野で考えた場合の「国立公園」の認知度や注目度そしてパークレンジャー(自然保護官)が海外の子供のなりたい職業の上位に来るような夢を与えていることをお聞きして、自分自身が「妙高」に住んでいることのありがたみを実感することができた。

これもひとえにこちらの環境省「エコツーリズム推進アドバイザー事業」並びに鈴木先生のおかげだと思っています。今後どうか妙高市へのご厚情をお願いいたします。

## (6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

環境カウンセラー(広報戦略)、環境映像ディレクター・プロデューサー 鈴木 順一郎 氏

### ●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状と課題

妙高市は、日本百名山の一つである妙高山のすそ野に広がる豊かな自然に育まれた高原である。美しい景観はもちろんのこと、生態系の豊富さにも驚かされる。生物の多様な森林を有する地域である。さらに上信越高原国立公園に位置し、自然と人が共存する山岳型の日本を代表する自然公園である。

かつてはスキーのメッカとして相当な賑わいを見せていたが、近年のスキー離れから新たな集客を必要(大きなテーマ・課題)としている地域である。また、高齢化や山岳地近くの集落の過疎化、市全体の少子化も課題である。そのためにこの地域の基本である観光産業の活性化が切望されることである。

しかしながらただ単に集客すればいいというものではない。これだけの自然を有する妙高市にとって「人にも自然にもやさしい地域であること」が必要である。このことは妙高市の理念にもなっている。

### ●特に魅力を感じた地域の自然観光資源

6 箇所(6)の森林セラピーロード、上級コースとして百名山として知られる妙高山や火打山登山。貴重な山野草や、ライチョウを象徴とする希少な生物も多く雄大な自然が「妙高市」の宝であり生態系の豊かさに驚かされる。ビジターセンターに隣接するいもり池も興味深い。この他に7つの温泉や、歴史ある関山神社火祭り、冬場のスキー・スノーボードや雪上トレッキングなど魅力的な観光資源がある。また、冬場の観光客(スキー・スノーボード)には外国人が多く驚かされた。また国立公園であることも武器となる魅力的な要素である。

### ●アドバイス(講義等)の概要

- ① まず最初に、現在の時代に合った、私なりのエコツーリズムの考え方を解説させていただいた。その上で、「観光」であるがゆえに必要な広報戦略と宣伝の必要性について解説した。
- ② 町づくりの基本理念「生命地域の創造」が、エコツーリズムの考え方とマッチしているため、将来、可能性が広がれば「エコツーリズム成功の地」としてトライしていただきたい。その手法として、ご説明させていただいたように、町の施策のベースの考え方の中にエコツーリズムと環境教育を盛り込んでいただきたいと懇願する。
- ③ すでにエコツアーとしては6箇所の森林セラピーロードがあり、春から秋にかけてエコツアーも行なわれている。上級コースとしては百名山として知られる妙高山や火打山があり有名な登山コースを有している。貴重な山野草や、ライチョウを象徴とする希少な生物も多く雄大な自然が「妙高市」の宝とも言える。ビジターセンターに隣接するいもり池も興味深い。この他に7つの温泉や、歴史ある関山神社火祭り、冬場のスキー・スノーボードや雪上トレッキングなど、エコツーリズムの定着とエコツアー展開のバリエーションと魅力に富んでいることは間違いない。しかしながら、妙高市としての悩みとして、冬場のスキー人口をはじめとする観光入れ込み人口の伸び悩みから、財源確保が年々厳しくなっているため、夏場の集客に対してエコツアーの可能性に興味を持たれていることは理解できる現状である。しかし、これといって他の地域より特に突出している魅力的な素材ではなく、今存在する「妙高市の宝」をもう一度選出し、磨きをかけ、輝かせなければならない。
- ④ さらに、現時点ではまだまだまとまっていないが、エコツーリズムの考え方を推進、そしてエコツアーを展開する担い手にも恵まれている。ガイドの養成をするNPOや国際自然環境アウトドア専門学校があり、持続可能な経済効果を含めたエコツーリズムの計画が進展すれば、担い手の確保において、他地域の追従を許

さないくらいの恵まれた可能性を持っている。

- ⑤ 妙高市の宝はなんと言っても自然の中に入り、自然の豊かさ、生態系の豊かさを感じ、体験していただく事だと思う。まずは、この宝に集中し磨きをかけていくことが重要だと感じた。具体的には、初級から楽しめる「6箇所の森林セラピーロード」と「中級・上級登山＝百名山として知られる妙高山や火打山登山」をメジャー化することである。そのためにはどうしたらよいのか？ アイディアを下記に提案させていただく。

**提案 1**: 少なくなったとはいえ、市の観光入れ込み客の 30%を占める冬場のスキー場利用客に対し、PR 活動に注力し、夏場の集客を訴求する。冬場の来客に対し、夏場のトレッキング等のお得なクーポン発行などで客の興味を惹きつける。夏場に来てくれた客に対しては再び冬のお得なクーポン発行などで客の興味を惹きつける。「冬くれば夏も遊べる（お得な）ミョーコーさん」「夏くれば冬も遊べる（お得な）ミョーコーさん」といったような次につなげる集客作戦を実行し、時間をかけ広報戦略に基づき集客に努める。また、宿泊施設等にも協力依頼し、宿泊客についてのリピート率や、妙高の魅力についてリサーチし地元では気づかない「宝」の発掘・再認識をしてみることから始めてみる価値もある。

**提案 2**: 近年、冬場の宿泊客の中に外国からこの地に訪れる客数が増えていると聞く。オーストラリアやヨーロッパの客が多いということである。実際に今回のアドバイザー派遣事業で宿泊した旅館でも、8割方これらの外国人であった。そのため、外国人が喜ぶ「おもてなし」の工夫を旅館側も随所に取り込み、また、英語での会話についても従業員が長けており驚かされた。いろいろ取材をしてみると、妙高が国立公園であることを伝えるとかなり驚き感激してくれるらしい。ここに外国人利用客の更なるリピーターや、拡大の可能性が秘められているように感じる。というのも、もともと国立公園は欧米から始まっており、彼らの中で国立公園への評価は高い。この意識を利用しない手はなく、初級から歩ける 6 箇所の森林セラピーロードを魅力的に伝え、実際にリピーターとしてきてもらうことができるのか、また、その場合、どんなリアクションがあるのか調査すべきである。日本人ガイドにとってもオーストラリア人・西洋人・欧米人の自然に対する考え方や見方、遊び方を学べる場であり、日本だけでなく世界の妙高として注目を集めることを目標に取り組みられたら面白い。ここにはニュース性も高く話題となる可能性が大きい。逆輸入の形で日本国内に対して「国立公園としての妙高」を再認識してもらえることにも通じる。国立公園＝ナショナルパークとしての価値観を日本国民に伝えるチャンスにもなり、チャレンジする意義は非常に高い。また、外国人相手に、彼らが好む「日本食…妙高食のおもてなし（食のエコツーリズム）」なども強く可能性が感じられる。これらは、夕食時や朝食時に旅館の食堂で実際に現場を目の当たりにした感想である。

**提案 3**: 妙高市にはいろいろな魅力があるが、市民が愛してきた場所として「いもり池」がある。ビジターセンターも隣接しており、妙高山の正面に位置する絶景が望める。しかしこの池には誰が放流したのかわからないがブラックバスが繁殖しており、在来種の激減が心配されている。いもり池における植物の植生も変化があり、元の姿に戻さなければならない。これを「みんなで取り組むいもり池再生プロジェクト」と称して、特には市内の小学生を中心に生態調査を実行し、イモリの生息数や、周辺に生息する、野うさぎ、オコジョ、ホンドリス、テンなどの調査も兼ね、環境教育とエコツアーのコラボレート事業を展開していただく事をお勧めしたい。農業用水としても利用しているいもり池は、かいぼりもできるということなので再生させる可能性は大きい。これを市民の財産として市民の手で復活させるプロジェクトを成功させ、エコツーリズムにつなげていただけたら、話題性・広報効果もあり、また、妙高市のスローガンでもある「生命地域の創造」につながることもなり取り組む価値は相当高いと思われる。国立公園内であることも事業を進めやすい理由になるはずである。再生を手伝った多くの子供たちの名を、何らかの手段でいもり池のほとりに記念として彫りこみたい。これにより、意識の向上と、変わらないいもり池への「訪れ」の気持ちが、大人になっても根付くと考えられる。

以上のような点から取り組まれることをお勧めしたい。まずはニュース性の高いところから始め、妙高の名を高

めて集客がある程度成功したところで、オプションツアーとしての多様なツアーを用意すればいいと考える。外向け（観光客の更なる集客）と内向け（市民の意識向上）にエコツーリズムの考え方を導入した以上の3つの取り組みからチャレンジしてみたいかだろうか。

### ●全体構想への取組状況・意向について

私が今回うかがったもう一つの地域「福井県大野市」同様、エコツーリズムの導入口であった。「エコツーリズムの効果」「エコツーリズムへの取り組み方」「エコツーリズムの必要性」「取り入れる場合、どのような手順が必要なのか」「成功しているところ、なかなかうまくいっていないところの理由」など、様々な方向から質問が来た。ある程度理解していただいたという印象から、本格的エコツーリズムを導入するかどうか妙高市としてこれから検討されると思う。

### ●地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

前述の通り、妙高市には市としての大きな柱である基本理念「生命地域の創造」がある。大変良い理念だと思っている。その理念を是非とも実現させていただきたいし、応援させていただきたい。

最後に、将来、エコツーリズムを導入する場合の話だが、取り組みのネーミングだが「エコツーリズム」でなければならない必要はないと思う。考え方の土台部分にはしっかり「エコツーリズム」を導入していただき、掲げる看板としては妙高市の基本理念である「生命地域の創造プロジェクト」とか「生命地域ツーリズム」であってもいいのではないだろうか。その方が「妙高」らしい。